

民意の つくられかた

斎藤貴男

民意の つくられかた

斎藤貴男

民意のつくれかた

2014 年 12 月 16 日 第 1 刷発行

著 者 さいとうたか お 斎藤貴男

発行者 岡 本 厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

現代文庫編集部 03-5210-4136

<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

© Takao Saito 2014

ISBN 978-4-00-603277-7

Printed in Japan

はじめに

民意ってなんだろう。近年はやたらと用いられる用語だし、その大切さを政治家やマスコミが論じたがっていてもいるけれど、実際に重視されているかと言うと、そんな実感はまるでない。

そもそも実体そのものがあるのかどうかとも怪しい。それらしい体裁で現れてくるものも、ではいかにして形成されたのかと考え始めると、不安になってくる。いやいや、どれほどの情報操作に導かれたのにせよ、民意とはとどのつまり人々一人ひとりに委ねられた判断の総体だということになっている以上、みんなが長いものに巻かれた挙げ句の果てであつたとしても、それはそれで積極的な服従が選択された結果であることは確かなのだから、まぎれもなく「民意」ではないのかと思ひ直してみたり。

——などと禅問答もどきに思ひ迷っていた、あれは二〇〇八年の年の瀬だった。岩波書店の月刊誌『世界』編集部から、ルポルタージュ「民意偽装」なるテーマをいただいたのである。渡りに船と飛びついて連載し、やがて「民意のつくられかた」のタイトルで、二〇一一年七月に、一冊にまとめた。この仕事が今回、岩波現代文庫のラインナップ

プに加えていただけることになって、とても嬉しい。

連載期間は二〇〇九年の初夏から一〇年の暮れまでの不定期で、「3・11」——東日本大震災とこれに伴う福島第一原発事故の三ヶ月前には終了している。にもかかわらず原発関係の話題を多く取り上げていたのは偶然の産物だ。民意というものの本質を追いかけていたら、いつの間にか、図らずもそうなっていた。

連載期間中にあったのは、自民党から民主党への政権交代だ。もともと民意のテーマに照らせば基本的な構造に変化はなく、さほど戸惑わずに済んだのは楽ではあったが、世の中にとっては迷惑な話だった。劣化した自民党としか言いようのない奇怪な権力を見せつけられた反動なのか、二〇一二年末には再び自民党の、しかもいかにも強権的な権力の誕生という顛末が招かれたのだから。

いずれにしても筆者には、多少の時間の経過で簡単に古くなるような、薄っぺらな中身ではないぞ、程度の自負はある。この間に発生した幾多の事件や出来事が、むしろ本書の今日的意義を引き上げてくれたのではないかと、とも。

たとえば朝日新聞をめぐる一連の騒動だ。従軍慰安婦の問題に関わる過去の報道で、一部に誤りがあったとしてそれらを取り消した二〇一四年八月五日付朝刊紙面を契機に、ライバル紙や週刊誌などが連日、執拗な朝日新聞叩きを繰り返し、三ヶ月余を経た本稿

執筆時点も、なお続けられている。

メディアの相互批判それ自体は、本来、むしろ望ましいことである。いわゆる記者クラブ問題に象徴される、とかく独善に陥りがちなマスコミ業界の悪しき体質は、将来に向けて改善されていかなければならないからだ。ただし、そのような正論はあくまでも、必要な条件が整えられていて初めて成立し得るのではないか。

この騒動は違う。朝日新聞への集中砲火はあまりにファナティックで、戦時中もかくやと思わせるものがある。「売国のDNA」「国賊」「国益を毀損」「中国共産党と同じ発想」「全国民をはずかしめた」……。週刊誌が次々に繰り出した悪罵の数々は、通勤電車の中吊り広告やネット空間を通じて増幅され、日本社会の全体に浸透していく。慰安婦報道に関わった元記者が勤める大学に脅迫状や脅迫電話が殺到している惨状は周知の通り。朝日を取り消したのは慰安婦報道のごく一部だけなのに、その何もかもが虚報であつたかのような言説が罷り通った。

こうした動きと連動するかのようには、やはり朝日新聞が二〇一四年五月二〇日付朝刊の一面トップで放っていたスクープ記事も取り消された。福島第一原発事故当時の吉田昌郎所長（二〇一三年死去）が政府の事故調査・検証委員会に語り残した証言調書の内容をすっぱ抜いた報道である。

事故対応の拙劣さを白日の下に晒しただけでなく、この種の記録を公開せず、国民の

目から覆い隠してきた政府の姿勢に痛烈な疑義を突き付けもした成果は有意義だったが、九月には木村伊量社長ただかすが記者会見を行い、記事の表現に誤りがあったとして謝罪した。〈所員の九割にあたる約六五〇人が吉田氏の待機命令に違反し、一〇キロ南の福島第二原発へ撤退していた〉との記述や、〈所長命令に違反 原発撤退〉などとした見出しが、吉田氏の発言そのものが多くの所員らに伝わっていなかった現実^{まじ}に照らして間違っていたとされた。これを受けて詳細を審理した朝日新聞社の第三者機関「報道と人権委員会」(PRC)は同年一二月、記事取り消しは妥当だとする評価とともに、調書の入手から報道に至る過程も含めて、〈読者の視点への想像力と、公正で正確な報道を目指す姿勢に欠ける点があった〉という見解をまとめている。

記者たちは重い処分を受けることになるらしい。木村社長の引責辞任も決まったが、仮に朝日が直面したのが吉田調書報道の問題だけで、従軍慰安婦報道をめぐるバッシングがなかったとしたら、ここまでの事態に発展していただろうか。

していなかったに違いない、と考えざるを得ないのである。そこで思わず連想させられたのが「白虹事件」^{はっこう}だ。一九一八(大正七)年に発生した、日本新聞史上の重大事件である。『朝日新聞の九十年』(朝日新聞社、一九六九年)などの文献によると――、

当時の寺内正毅政権は非常に強権的で、ついには多発していた米騒動(コメの価格急騰に対する暴動事件)に関する一切の報道を禁じる措置を取る筈に出た。当然、新聞関

係者らは猛反発。名古屋以西の各社トップが八月の大阪に集った「関西新聞社通信社大会」で、言論擁護と寺内内閣糾弾の宣言、および内閣退陣要求の決議が可決された様子を大阪朝日新聞が報じたところ、次の件が新聞紙法の定める安寧秩序紊乱びんらんの罪に問われて起訴され、裁判ではさらに、内乱罪にも通じる「朝憲紊乱ちようけんびんらん」(国家体制を侵害すること)の罪にさえ結び付けられかけたのだった。

へ食卓に就いた来会者の人々は、肉の味・酒の香に落ちつくことが出来なかった。金甌無欠の誇を持った我が大日本帝国は、今や怖ろしい最後の審判さばきの日が近づいてゐるのではなからうか。「白虹日を貫けり」と昔の人が呟いた不吉な兆しらせが黙々として肉叉フオークを動かしてゐる人々の頭に電いなずまの様に閃く

「白虹日を貫けり」というのは、白い虹が太陽を貫いているように見えたら、それは兵乱の兆であるという中国の故事成語だ。それまでも反寺内の論陣を張っていた大阪朝日に対する権力の怒りは凄まじく、記事を書いた記者とその上司は禁錮刑。村山龍平社長が路上で暴漢に襲われて負傷する一幕もあり、最終的に村山社長の辞任と編集局長や論説委員らを含む約三〇人が退社に追い込まれた。

それだけでは済まなかった。取り潰しを免れるために朝日新聞は、以下のような「改過」(過ちを改めること)。「朝日新聞の九十年」にあった表現(宣言を行ったのである)。

へ朝日新聞編輯綱領

一、上下一心の大誓を遵奉して立憲政治の完美を裨益し、以て天壤無窮の【ママ】皇基を護り、国家の安泰国民の幸福を図る事。

一、国民の思想を善導して、文化の日新国運の隆昌に資し、以て世界の進運と並馳するを冀ふ事。

一、不偏不党の地に立ちて、公平無私の心を持し、正義人道に本きて、評論の穩健妥当、報道の確實敏速を期する事。

一、紙面の記事は清新を要すると共に、新聞の社会に及す影響を考慮し、宜しく忠厚の風を存すべき事。

この綱領四則は、今日新たに制定せし者に非ず。其の趣旨は四十年来執り来りし所の本来面目にして、従来編輯に従事せし先輩等の語り継ぎ言ひ伝へつゝ、実行し来れる不文律なるは、従前の社説社告昭々として之を証するに余りあり。忠実篤厚なる先輩ありて後進を指導せし時代は、不文律として操存把持しつゝ、其の趣旨を実現するに難からざりしも、物換り星移り、新陳代謝の後に至りては、或は其の本を忘れて其の末に趨る者なきを保せず。況んや近年已に不偏不党の宗旨を忘れて偏頗の傾向を生ぜしをや。是れ我社が従来の不文律を明文に著はして、以て永遠の実行を期する所以なり。

「不偏不党」を編集方針に掲げた新聞は、日本ではこれが最初だったと言われる。政治的な立場を鮮明にした政論新聞こそ一流とされていた日本ジャーナリズム史の一大転

換点は、こうして招かれたのだった。

白虹事件以降の新聞がどのような歴史を辿ったのかは言うまでもない。ひたすら権力にすり寄り、あるいは競って大衆を煽り立てては、この国を戦争に導くのに一役も二役も買っていたのである。

現代の朝日新聞と、日本の社会が置かれた状況が、白虹事件の時代と重なって見えてくる。朝日には九年前の二〇〇五年にも、「NHK番組改変事件」の報道をめぐって秋山耿太郎社長（当時）が記者会見で頭を下げた経緯があった。

NHK教育テレビが二〇〇一年に放映したドキュメンタリー番組「シリーズ・戦争をどう裁くか」の第二回「問われる戦時性暴力」に、安倍晋三・中川昭一両衆議院議員の介入があった事実を、彼ら自身の証言入りで伝えた、第一級のスクープ。にもかかわらず安倍氏らは数日後に「捏造だ」と騒ぎ出し、自民党が「もう朝日の記者の取材は受けない」と機関決定するなどして大混乱に陥った。この騒動の過程で安倍、中川両氏らの証言記録に基いた内部資料が一部の雑誌に流出し、記事化されたため、秋山社長は危機管理の文脈で、「皆さまの信頼を損ねた」と謝罪した。当のNHKをはじめ、朝日新聞以外のマスコミ各社はこの時も、番組改変報道のすべてを断罪するかのようなスタンスを取り続けていた。

やがて中川氏は亡くなり、二〇一四年の安倍氏は二度目の政権を握っている。憲法を権力の制限規範として位置づけた近代立憲主義を軽んじる彼は、その点でも白虹事件をもたらしした寺内正毅首相と共通している。大阪の通天閣にある庶民の神様像によく似た尖って禿げた頭と、あまりに強権的な政治姿勢から、寺内首相は「ビリケン（非立憲）宰相」の異名を取っていた。

白虹事件の頃とは異なり、今日の日本に権力が新聞社を潰すことのできる法的根拠はない。それでも朝日新聞があえてあの時期に、目下の言論状況では袋叩きに遭うとわかりきっている慰安婦報道の一部取り消しを図ったのは、消費税率の八%から一〇%への再増税に臨んで、日本新聞協会が自民党税制調査会に要望している軽減税率の適用と無関係ではないのではないかとする説がある。再増税に伴う新聞料金の値上げは人々の生活字離れを加速し、国民の知的水準を危うくする、だから食料品や生活必需品と同様の扱いを、というのが新聞業界の主張だが、理念としての適否をさて置く限り、業界団体として具体的な言動の数々は、所詮、政治や行政への陳情に他ならない。

従軍慰安婦に対する安倍首相のスタンスは、従来の朝日新聞のそれとは正反対だった。何かをねだれば何らかの見返りを求められるのが世の習い、というわけだ。

本稿執筆時点では、あくまでも関係者の一部で囁かれている推測にすぎないが、消費税に関する著書も何冊かある筆者には、あり得ない話だとは思えない。今後の取材テ-

マのひとつにもしていこうと思う。

朝日新聞に関わる話題に紙数を費やし過ぎたかもしれない。恐ろしいのは、しかし、必ずしも政治や新聞社を取り巻く状況ではない。かくなる時代に醸成される空気であり、そこから導かれ、次の時代を築いていく「民意」なのだ。

二〇一五年以降の日本社会には、はたしてどのような「民意」が形作られていくのだろうか。今の筆者にできるのは、本書の底本である二〇一一年刊の単行本「あとがき」にも書いた、我ながら気に入っている一節をもう一度、強調しておくことだけである。

取材を重ねれば重ねるほど、考え込むことばかり増えていく仕事だった。民主主義の建前など欠片さえも残っているのかどうか。この国には政府や巨大資本の意向がまずあって、いわゆる民意はそれらに都合よく誘導されていくことが義務づけられているものでしかないときえ思われる場面を幾度も見せつけられた。

単に情報操作というのとは異なっている。もつと深いところで、莫大なお金が使われ、マスメディアだけでなく、社会のありとあらゆるメカニズムが動員されて――。

そのようなシステムに導かれた末に今回の原発震災もあるのかと思うと、悔しくてならない。朝日新聞社と福島大学の今井照^{あきら}研究室が東日本大震災から三カ月を機に実施した避難住民への聞き取り調査によると、震災以前は原子力発電所が「安全だと思って

いた」人が四五%、「ある程度安全だと思っていた」人が二一%を占めていたという（『朝日新聞』二〇一一年六月二四日付朝刊。調査は県内外の避難所や避難先の住宅などで行なわれ、四〇七人が応じた）。

今度こそ私たちは、権力への服従が「大人の態度」であり、望ましい姿勢だとされている生活様式からの脱却を目指さなければならない。原発を推進した側の暴走を批判するのは当然だが、彼らの思惑だけでは何ひとつできるはずがないのも、また真実であるからだ。一億総懺悔という意味ではもちろんない。推進した指導者層には私財の提供をはじめ、考えられ得るすべての方法で責任を取らせた上での話である。そのことが伴わなければ、彼らはゼロリスク・ハイリターンのパラダイスを謳歌し続け、未来永劫、同じような出鱈目を繰り返していくに違いない。

原発に限らない。要するに、よほど賢くならないと、生きていけない時代なのである。

なお、この現代文庫版では、章立てを底本のそれとは多少改めている。底本では割愛した「派遣村バッシング」（初出『世界』二〇一〇年四月号掲載）を採録し、代わりに「事業仕分けの思想」（二〇一〇年三月号掲載）を外した。順序を入れ替えた章もいくつかある。

第1章「言論人が国策を先導するのか」は新たに書き下ろした。本書刊行の少し前に

発行される『世界』二〇一五年一月号にも掲載される予定だが、編集作業の順番は、こちらの方が先行した。

第2章「つくられた原子力神話①」(「浸透する原発政策」の題で、二〇一〇年二月号掲載)は、原発政策を支える「民意」の背後を取材した。佐藤栄佐久・元福島県知事の証言は貴重だと思う。

第3章「ジャーナリズム、教育をまきこんで——つくられた原子力神話②」(「国策PRを担う人々」の題で、二〇〇九年十二月号掲載)は、第2章と同じ領域を別の視点で掘り下げた。取材しながら、ジャーナリズムはここまで舐められているのかと慄然とした。

第4章「国策PR」(二〇〇九年十二月号掲載)は、問題が原発に限られているのではない実態を描いた。程度問題のハードルが下がり過ぎている。

第5章「捕鯨国ニッポンの登場」(「鯨と世論」の題で、二〇一〇年十二月号掲載)は、実に奥の深い領域だった。一見わかりやすく、単純なようにも見えがちなのに、一筋縄ではいかない。国際捕鯨委員会(IWC)ではこの間もさまざまな動きがあったが、基本的な構造は本章に書いたまま、ほとんど変わっていない。

第6章「道路とNPO」(二〇〇九年八月号掲載)のキーワードは、「新しい公共」という概念だ。安倍政権の雇用政策で再検証の必要が高まってきた第7章「派遣村バッシング」の内容とも通底してくるものがあるのではないか。

二〇二〇年東京オリンピック招致が決定している現状では、その前の一六年招致を目指した当時の動きを追った第8章「五輪招致という虚妄」(二〇〇九年七月号掲載)は、すでに賞味期限を過ぎていると受け止められるかもしれない。だが決してそんなことはないはずだ。読んでももらえればわかつていただけたらと思う。

第9章「仕組まれる選挙」(二〇〇九年九月号掲載)は、寒気を堪えながら取材し、書き綴った記憶がある。選挙制度をいじるのもいい。だが、この国の社会に、それなりの民主主義が根付く日が本当にやって来るのか、根源的な疑問を抱いてしまったためである。

編集の柿原寛さんと熊谷伸一郎さん、取材を手伝ってくれたジャーナリストの梁英聖^{リヤン・ヨンソン}さんに深く感謝したい。民意とは何なのか、もしかしたら永遠に解明されることのないかもしれない大テーマに、それでも挑んでみた。本書が少しでも読者の考える縁^{よすが}になれたら嬉しいとは底本にも書いたことだが、現代文庫入りを機に、その後の奔流をもフォローしていく必要を感じ始めてもいる。なお、本文中に登場する方々の肩書きは、取材時のそれであるか、記述の内容に即した時点のものであることを付記しておきたい。

二〇一四年二月

斎藤貴男

目 次

はじめに

第1章 言論人が国策を先導するのか…………… 1

第2章 つくられた原子力神話①…………… 25

第3章 ジャーナリズム、教育をまきこんで
——つくられた原子力神話②——…………… 71

第4章 国策PR…………… 107

第5章 捕鯨国ニッポンの登場…………… 137

第6章 道路とNPO…………… 171

第7章 派遣村バッシング…………… 203

第8章	五輪招致という虚妄	225
第9章	仕組まれる選挙	265